（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（　人間・環境学　）	氏名	Oana Loredana Scorus
論文題目	日本の近代的造園の誕生 ―明治時代の造園書から見た庭園の自然性を中心に―		

（論文内容の要旨）

明治時代には、無鄰菴、対龍山荘、清風荘などの庭園に代表されるような、自然性が高いと評価される新しい庭園様式が形成された。本研究は、こうした様式をもつ庭園を明治庭園と呼び、この明治庭園の自然性の起源を明らかにするものである。先行研究においては、明治庭園の自然性の起源に関して、自然主義や個人主義など西洋から導入された思想と、イギリス風景式庭園の影響が指摘されてきたが、これらは推測にとどまっている。それに対して本研究は、明治時代の造園書を網羅的に精査することを通じて、この起源をめぐる言説を再考する。

全体は四章からなる。第一章では、横井時冬『園芸考』（1889年）の内容および背景について検討した。最初の日本庭園史でもある『園芸考』は、明治中期以降の庭園論に多大な影響を与えた。本書における明治庭園とその自然性についての記述を分析した結果、横井が明治の庭師に対して、江戸時代以前に造られた名園を保護し、新しい庭園の見本とすることを求めていたことがわかった。

第二章では、明治期を通じて未分化であった庭造りと園芸の関係を、その変遷と併せて明確にしたうえで、園芸にかかわる書名をもつ造園書を整理した。これにより、次章以降の分析において、書名に「園芸」とありながらも実質的には造園書であるような資料を遺漏なく拾い上げることができるようになった。

第三章では、従来明治庭園の自然性の起源とされてきた西洋庭園に目を向けた。そして、その自然性と明治庭園との関係が、当時の造園関係の資料においてどのように論じられているかを明らかにした。以下では本章各節の概要を記述する。

第一節ではイギリス風景式庭園に関する記述を分析した。イギリスの庭園を論じる資料のうち、イギリス風景式庭園を自然的であると評価するものは複数あったものの、明治庭園がイギリス風景式庭園から学ぶことで自然的になると主張する資料は見当たらなかった。それどころか、従来の日本庭園がイギリス風景式庭園より自然的であると断言した資料も存在した。

第二節では、イギリス以外の西洋庭園からの明治庭園への影響を検討した。日本の近代的造園論が始まる明治中期の早い段階に発行された資料では、西洋庭園を概して不自然なものと指摘することが主流であった。1890年前後からは西洋庭園の自然性が部分的に評価されるようになった。明治後期になると、西洋庭園を自然的であるとする資料と、自然的ではないとする資料が混在していた。なお、明治中期・後期を通じて、西洋庭園の人工性を主張する資料では、日本庭園の意匠と西洋庭園の意匠を対照的に論じ、これによって前者の自然性を強調する傾向があった。また、技術面に関しては日本が西洋か

ら学ぶべきであるという主張も見られたものの、意匠面に関しては日本庭園が西洋庭園から学ぶことによって自然的になるという主張はほぼ見られなかった。

第四章では、第三章の結果と、第一章で明らかになった「自然な庭園を造るために従来の名園を見本にするべきである」という横井の主張を踏まえ、明治庭園の自然性が、西洋庭園との対照によって注目されるようになった従来の日本庭園の自然性を起源とするという仮説を検証した。具体的には、明治庭園で見られる自然性が従来の日本庭園から受け継がれたかどうかという点と、明治庭園がなぜ自然的でなければならなかったのかという二つの疑問に答えることを目的とした。

まず第一節では、江戸時代以前の造園書で象徴と自然性がどのように論じられていたのかを明らかにするために、『築山庭造伝』の前編を中心に分析を行った。その結果、当時は象徴と自然性の双方が庭園には必要不可欠と考えられ、いずれも重視されていたことが明らかとなった。第二節では、明治前期における日本庭園の自然性を明らかにするために、時代背景を踏まえて、万国博覧会の報告書を分析した。その結果、万国博覧会では日本美術が西洋人に高く評価され、同時に日本庭園にも注目が集まるようになったことがわかった。

第三節と第四節では、明治中期以降の造園書における日本庭園の自然性の扱い方を明らかにするために、象徴と自然性の関係を論じた箇所を中心に分析した。明治庭園が発展しはじめる直前の1890年前後の造園書では、庭園の自然性を主張する一方で象徴を重視しないアプローチ、すなわち従来明治庭園の特徴として指摘されてきたアプローチが主流であった。また、これらの資料では、自然性のモデルとして江戸時代以前の日本庭園が想定されていた。ここに、明治末に明治庭園の自然性が伝統的な庭園の自然性の延長とみなされたことを併せて鑑みれば、明治の造園書においては、明治庭園の自然性の起源は従来の日本庭園にあると考えられていたと結論づけることができる。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は日本の近代的造園の中心的な特徴、すなわちその自然性という特徴の起源を同時代の造園書から明らかにしたものである。いわゆる明治庭園の意匠がとりわけ自然的であることはつとに指摘されており、またその意匠の源泉となった自然風景についても、さまざまな研究が積み重ねられてきた。しかしながら、そうした先行研究に対しては、そもそも明治庭園がなぜ江戸時代以前の庭園より自然的でなければならなかったのか、という疑問が残る。この自然性の起源に関して、従来の研究では明治以降導入された西洋思想やイギリス風景式庭園の影響が指摘されてきたが、著者によればこれらは推測にとどまるものであり、具体的な根拠に欠ける。それに対して本研究は、同時代の造園書の精読を通じて、明治庭園の自然性の起源を、言説面から実証的に明らかにしようとした点に大きな新規性がある。

第一章では、横井時冬『園芸考』の詳細な分析から、日本庭園史のさきがけでもある本書が同時代および後世に与えた影響を詳らかにした。第二章では、明治期にはいまだ明確に分けられていなかった庭造りと園芸の関係およびその変遷を明らかにした。第三章では、明治庭園の自然性の起源が西洋の思想や庭園にある、という従来唱えられてきた説を当時の言説をもとに再考した。第四章では、明治庭園の自然性の起源が江戸時代以前の日本の庭園にあるという仮説を、やはり同時代の言説から検証した。

丹念な資料調査の結果、イギリス風景式庭園の自然性を主張する資料は存在するものの、イギリス風景式庭園から学ぶことで日本の庭園がより自然的になると主張する資料は存在しないことが明らかとなった。ここから、明治庭園の自然性がイギリス風景式庭園をもとにしたという従来説に反駁を加えた点は、本論文の大きな成果のひとつである。

本論文のいまひとつの成果は、明治期の造園関係資料を通時的に調査することを通じて、明治庭園の自然性が西洋に起源を持つものではなく、江戸時代以前の日本庭園にあることを実証した点である。それによれば、明治庭園の自然性は二つの点において伝統的な庭園を参照している。すなわち、日本の名園が庭園の自然な意匠の理想とされた、という点と、庭園における自然の写し方が従来の庭造りから学ばれた、という点である。一方で著者は、明治庭園における自然性の「強調」には、「外的な視線」の影響もあると指摘する。すなわち、明治以降、西洋のまなざしを意識する形でいわゆる「日本美術」が誕生したのと同様、明治庭園誕生の背景にも、西洋庭園を意識する形で日本庭園の特質を「内省」する過程があった、というのである。この意味において、明治庭園の誕生に西洋庭園の影響はあったと捉えることもできるが、ただしそれはもちろん、従来指摘されてきた「影響関係」とは別のものである。

なお、上述した明治以降の庭園の方向性を決定づけた書物として横井の『園芸考』を挙げることができる。横井は、美しい庭園を造るために、法則や象徴よりも美的感性を重視した。また彼は、最も自然性の高い日本庭園として露地を挙げ、明治以降の

庭園がこの露地の自然性を受け継ぎつつ、さらに桂離宮庭園のような大規模な庭園を目指すべきであると説いた。このように、明治庭園の形成史の中に『園芸考』を適切に位置づけたことも本論文の意義に数え上げることができる。

一方で、改善が期待される点もないわけでない。第一章は『園芸考』という日本庭園史における重要著作を詳細に分析した点で独立した価値を持つものの、その「時代別様式叙述」を論じた箇所など、全体の論旨からすると若干浮いて見える部分もないわけではない。また、第二章で詳細に検討した園芸と庭造りの関係の変遷に関しても、興味深い論点が提示されながら、次章以降の議論に必ずしも活かされていないところが見られた。これらは、著者の今後の研究活動も含めて、解決すべき課題として残りはするものの、しかしながらその総体的な成果を考慮するならば、本論文にとって決定的な瑕疵とまではいえないものである。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和5年12月2日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：　令和　　年　　月　　日以降